

宗教で読み解く世界 (1) キリスト教の世界

～講義録～

●キリストとは「救い主」という称号

橋爪大三郎です。本日は、キリスト教についてお話ししましょう。

キリスト教で一番大事なのはイエス・キリストです。そういう人物がいたのです。イエス・キリストは何者なのか。これが分かると、キリスト教が分かります。

まず、名前についていえば、「イエス (Jesus) 」というのは与えられた名前で、太郎、花子のようなものです。親に付けられた人間としての名前です。では、「キリスト」は何かというと、これを名字だと思っている人がいますが、当時、名字はありませんでした。キリストというのは「救い主」という称号です。キリスト (クリストス) というのは実はギリシャ語で、ユダヤ人との間に生まれたのですが、皆は彼のことをメシア (救い主) だと思ったわけです。救い主 (メシア) のキリスト、これがギリシャ語になって、イエス・キリスト、あるいはキリスト・イエスと呼ぶようになりました。これがヨーロッパ言語で知られているイエス・キリストです。

●キリスト教は一神教としては変則的

さて、イエス・キリストというのは、皆さんご存じかもしれませんが、神の子であり、救い主キリストです。このようになっているのですが、実はここから少し話がややこしくなります。

キリスト教は一神教で、神様が1人いるという考え方でしょう。神様は1人という考え方なのに、神の子がいるというのは、一神教としては大変変則的なことで、つまり一神教らしくないのです。一神教らしくないキリスト教が、もともとのユダヤ教の間から出てきました。そして、母屋を乗っ取るような形で、ユダヤ教よりも何十倍も大きなグループになって、今、世界を席卷しているという、こういう不思議なことが起こるのです。

そこで、話の順番として次のようにお話しします。一神教とは何か。一神教から見て変

橋爪大三郎

則的なイエス・キリストはなぜ生まれたのか。イエス・キリストが十字架で犠牲になって死ぬと、なぜ人類が救われるのか。これはいずれも大きな問題ですが、これをかいつまんで、ごく短くお話しするのが今日の目的です。

●一神教は神様が1人いて世界をつくったという考え方

まず、一神教とは何か。一神教というのは、神様が1人いて世界をつくりましたという、こういう考え方です。ユダヤ教はこういう考え方で、その神を「ヤハウェ」といいます。『旧約聖書』という書物があってキリスト教でも使っておりますが、あれはもともとユダヤ教の聖典なのです。特に最初の5冊、『創世記』『出エジプト記』『レビ記』『民数記』『申命記』というものがあるのですが、この5冊を「モーセ五書」、すなわち預言者モーセが伝えた5つの書物ということで、ユダヤ教ではこれを非常に重視しています。

そこに書いてあることなのですが、ヤハウェがあるとき、世界をつくりました。太陽をつくって、星をつくり、天体をつくって、地球をつくり、山をつくって、川をつくり、植物をつくって、動物をつくり、最後に人間をつくる。これに6日間かかった。つまり、つくり主ということで、つくり主がいるのが一神教の特徴です。

つくり主といっても、ピンとこないかもしれませんが、要は世界を製造したのです。物を製造すると、製造されたものはつくれた人が所有するものになります。例えば、トヨタ、日産の自動車はトヨタ、日産のもので、だから、売ることができます。どんなものをつくっても大体そうなのですね。この考え方が人間にも当てはまっていて、人間は神がつくれたもの、被造物ですから神の所有権があるわけで、つくり終わった後も、ずっと神の支配権が及んでいます。

また、アダムをつくった。次にエバをつくった。それ以外の人間は、お母さんから生まれているように見えますけれども、実は神がつくれたのである。このように一神教では考えます。そうすると、例えば、ジョンがいて、メアリーがいて、エリザベスがいて、皆一人一人、「ジョン、君はジョンになりなさい」「メアリー、君はメアリーになりなさい」と神に命じられて、この世界に出現した。そして、寿命のある限り生きている。寿命がきたら、命を神に返して亡くなる。これが人間の一生である。こういうことです。

●当局にとってイエスは危険人物

人間だけではなく、山も、川も、自然も、全て自然法則によって、神の命令に従って動いている。この世界は神が支配する場所である、と考えます。支配している証拠に、モーセのような預言者が現れます。神の言葉を伝えるので、それに従っていなさい、ということです。これは宗教法であり、ユダヤ人はユダヤ法、イスラム教徒だったらイスラム法に従うわけで、これが一神教の骨格です。

一神教の信仰というのは、神がこの世界の主人であること、神の命令に従うこと、それが人間の定めであり、人間の生きる価値であり、こういう生き方が正しいということです。ユダヤ教もイスラム教もこうなっているのですが、キリスト教は少し変則的なのです。どうしてかというと、ナザレのイエスが現れたからです。

ナザレのイエスは、福音書を読んでもみると、以下のようなことを言っています。

「ユダヤ人の皆さん、皆さんはモーセの律法というものを知っているでしょう。モーセの律法が守れる人と守れない人がいるでしょう。この社会には勝ち組と負け組がいます。勝ち組の人はお金もあり、権力もあって、神殿にたっぷり捧げものができるし、律法を守ることができる。でも、毎日その日暮らしであくせくしている人とか、しょうがなくローマの税金を集める係になってしまった人、いろいろと家庭環境が貧しい人などは、律法を守れないわけです。そういう人がいると、律法にうるさいパリサイ人がやってきて、その人たちをいじめます。でも、神様はそういうことを望むでしょうか。律法というのは神様と人間の間を正すためにあるわけであって、人間をいじめるためにあるわけではありません。そういう神様の愛が、神様の本当の意思なのです。律法に惑わされてはいけません」

このようなことを言っていたので、当局にとってみればイエスは危険人物です。そこで、折あらず殺してしまおうということで、彼は逮捕されて、十字架にかかって亡くなってしまいました。

●イエスは復活したので救い主・神の子という考え方になった

これで終われば、キリスト教にならなかったのですが、3日目にお墓のところに弟子たち、女たちが行ってみたら、お墓が空っぽだったのです。どうしたのでしょうか。そのうち、誰が言うともなく、「イエスは復活した。復活して天に昇ったのだ」と言われるようになりました。逮捕されて死刑になったから失敗したように見えるが、これはもともとの計画だ。人間はあまりに罪深いので、その罪をイエス・キリストが身代わりになって、

橋爪大三郎

それで犠牲になった。だから、イエス・キリストが亡くなったということ信じれば、人類は救われるのだ。こういう考え方がだんだん出来上がっていったのです。

そして、イエスはもともとただの人間、ナザレのイエスという人だったと思うのですが、復活したので救い主であり、そして、神の子である。こういう考え方になったのです。これがキリスト教という考え方の非常に重要な骨格です。

●キリスト教徒は法律を取り替えることができる

さて、イエス・キリストがいると、普通の一神教とどう違うかということ、普通の一神教、つまりユダヤ教やイスラム教は、神が決めた法律というものがあります。モーセの律法・ユダヤ法、ムハンマドが伝えたアッラーの法律・イスラム法、これらは神が立法しているのです、人間は従うしかなく、どうしようもありません。神が立法者だからです。

ところが、イエス・キリストは、モーセの律法に文字通り従わなくてもいいですよと言ったのです。人間はそのようなことは言えませんが、神の子だから言えたに違いない。では、律法よりもイエスの言葉に従っていきましょう。福音書を読む、あるいはキリスト教徒になると、こんな考え方になるのです。

そうすると、法律はなしということになります。法律なしで人間らしく秩序を持って生きていけるだろうか。ローマ帝国の法律があるから大丈夫ですよ、というのは初期教会の考え方なのですが、ローマ帝国はなくなってしまいます。そうすると、法律なしになってしまった。では、どうしよう。そこで、ゲルマン人はゲルマンの法律に従いなさい。イングランドの人はコモン・ローに従いなさい。フランス共和国の人は議会で法律を作って、それに従ってもいいですよ、ということになりました。

つまり、キリスト教徒は法律を取り替えることができるのです。人間で新しい法律をつくってもよろしい、ということです。法律が変わるといのは、世の中が変わる根本になります。そういう手段を図らずも手に入れた。これがキリスト教の秘密であって、特に過去500年ほど、キリスト教徒はたくさんの法律をつくり、憲法をつくり、国民国家をつくり、世界に乗り出します。

つまり、近代化が始まったけれども、近代化なるものができるのも、イエス・キリストの教えが原点になっているからで、これがキリスト教の秘密であろうと思います。

宗教で読み解く世界（2）イスラム教の世界

～講義録～

●イスラムに関する理解度が低い日本

橋爪大三郎です。今日は、イスラム教についてお話ししましょう。

イスラム教はキリスト教に比べて、日本人にはなじみが薄いかもしれません。周りにイスラム教徒があまりいないからです。ですから、日本人はイスラム教になじみがなくても当たり前とっていますが、でも、これは世界の常識と違うので注意してください。イスラム教徒は全部で15億人ほど、主にミドルイースト（中東）という場所にいますが、中央アジアやアフリカ、インドの両側や東南アジア、インドネシアに至るまで、世界中にいます。

ヨーロッパは、イスラム世界と境を接していますから、ヨーロッパ人はいつもイスラムを意識しています。もう1000年以上意識しています。インドはイスラム世界と混じり合っています。ヒンドゥー教とイスラム教は、実はあまり仲が良くない面があるのですが、いつもイスラムを意識しています。

中国は新疆ウイグルというところを清朝が占領して、中国の一部にしました。そこはウイグル族やカザフ族がいて、人口の大部分がイスラム教徒です。そこから中国中にいろいろな人が入り込んできていて、3,000万人ほどいると思うのですが、中国の都市だったら、必ずイスラムレストランがあったり、イスラムのコミュニティーがあったりします。ですから、中国の人たちはイスラム教をいつも意識しています。

このように考えていくと、ロシアももちろんイスラムと境を接していますので、世界中でイスラムについてあまり興味と関心がなく、イスラム教徒もほとんどいないというのは、日本だけなのです。日本はそういう意味でイスラムの理解度が非常に低いので、基礎的なことをしっかり学ぶ必要があります。

●イスラムを考えていく順番とアッラーの意味

さて、イスラムのことを考えていく順番についてお話しします。アッラーという神がい

橋爪大三郎

るのですが、アッラーとは何か。それから、預言者ムハンマドという人がいますが、ムハンマドとは何か。また、ムハンマドの聞いたアッラーの言葉、アッラーの啓示をまとめたコーラン（クルアーン）という本がありますが、コーランとは何か。さらに、イスラムの人々はどのように宗教生活を送り、日常生活を送る人々なのか。こういう順番で理解していくのがいいかと思います。

最初にアッラーについてです。アッラーを神の名前だと誤解しないようにしてください。アッラーは名前ではありません。アラビア語で神（God）という意味です。キリスト教徒の場合、英語圏の人は神を God と呼びます。「Oh my God !」など、いろいろ言っていますが、その God は普通名詞で、名前ではありません。神様は 1 人しかいないので、名前は必要なく、名前で呼んではいけないので名前はないのです。そこで God と呼ぶしかない。これが一神教のルールなのですが、同じ考え方で、アラビア語では神をアッラーと呼ぶのです。

●ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の神は全て同じ神

では、このアッラーは世界のつくり主なのかどうかというと、つくり主です。そのように自分で、コーランの最初に述べていますから間違いありません。そこで、皆さんは「あれ？」と思うかもしれません。「キリスト教、ユダヤ教のときにはヤーウェ（ヤハウェ）が世界をつくったとは言ってなかったですか。ヤーウェとアッラーの関係はどうなっていますか」と。答えは、ヤーウェとはアッラーのことなのです。アッラーがヤーウェのことです。一神教では実は 1 人の神様しかいません。ユダヤ教の神様と、キリスト教の神様と、イスラム教の神様は、同じ神様なのです。

これはコーランにはっきり書いてあります。コーランでは、アッラーが自分のことをこう言っています。「私は世界をつくった。最初につくった人間はアダム（アーダム）である。彼は最初のムスリムである。それから人間はみんなムスリムになっていって、ノアの洪水のノアもムスリムだ」と。

それからユダヤ人の始祖ということになっているアブラハム（イブラヒーム）もムスリムである。アブラハムの子どもに一人っ子ということになっているイサク（イスハーク）がいるが、実は腹違いのお兄さんにイシュマエルがいる。イスマイルともいうが、この人はお父さんの元を離れて砂漠に出ていき、アラビア人の祖先になった。イサクの方はユダヤ人の祖先になった。こうしてイスラム教からユダヤ教が分かれたのだ。これがイスラムの考え方です。

●最大の預言者ムハンマド、一神教の最上格イスラム教

アラビア半島にいたイシュマエルの子孫は、その後、墮落してアッラーのことを忘れ、多神教徒になってしまった。そこでアッラーは困ったなと思って、ムハンマドに「お前が行ってアラブの人たちに一神教を教えなさい。そして、世界に一神教であるイスラムを広めなさい」と、このように命じた。ムハンマドはその通りに行動したため、イスラム教中興の祖である。このように考えるのがイスラムの特徴です。

今、ムハンマドの話になりましたので、それを続けると、ムハンマドはアッラーに選ばれた預言者です。アッラーの預言者は、実は大勢いるとコーランに書いてあります。旧約聖書のユダヤ教の預言者モーセ、イザヤ、エゼキエルなどで、彼らは皆、アッラーの預言者です。それから新約聖書に出てくる人々、例えば洗礼者ヨハネ、マルヤムの子イーサー（ナザレのイエスのこと）もアッラーの預言者であるというのが、イスラムの考え方です。そうしたアッラーの預言者が大勢いた中に、最後に最大の預言者ムハンマドが出てきた。これがイスラムの立場です。

したがって、ムハンマドの預言が他の預言者の預言より大事になります。だから、コーランが他の本より大事なのです。そして、最後の預言者ということは、ムハンマドで打ち止めなのですが、逆にいえば、ムハンマドより前にアッラーの預言者が大勢いたという意味になります。これがイスラムの立場なので、ユダヤ教があるけれど、あれはアッラーの預言者に従う宗教である。キリスト教というものがあるけれど、あれはアッラーの預言者に従う宗教である。ただ、従っている預言者がムハンマドより格下なだけである、ということになります。

そこで、一番いいのはイスラムに改宗することなのだが、それが嫌であれば、税金を払えば、ユダヤ教徒はユダヤ教徒のまま、キリスト教徒はキリスト教徒のままでもいい。このようになっているわけです。

ちなみに、イスラム教では、イエスは十字架で死ななかつたことになっています。身代わりの誰かが十字架についたということで、イエスはうまく逃れて、神によって生きてままた天に上げられた。そして、世界の終わりの日には再びやって来て、地上を支配し、悪をやっつけ、そして、ユダヤ教徒とキリスト教徒を率いてイスラム教に合流する。このように書いてあります。ですから、イスラムはそういう意味で、自分たちは他の一神教よりも格が上で、究極の一神教だと、このように思っているわけです。

●イスラムの法律の源泉は「神に従う」という原則

コーランは日常生活をコントロールする法律になっているのですが、この構造についてご説明します。

まずコーランは法律ですが、読んでみますと、文学作品のようで、第1条何々、第2条何々というような法律の形になっていないのです。そこで、法学者という人が出てきて、法律として適用できる形に整理します。整理するのに、コーランが第1の位置付けになります。2番目に大事なものは、ムハンマドがこういう裁判をしました、こういうことを命令しましたという記録です。これが2番目の法律になります。3番目としては、法学者が相談して一致した意見（イジュマー）が大事なのです。2番目のムハンマドの伝承は、スンナやハディースなどといいます。4番目は三段論法で、「こうですね」というように論理で納得するというものです。

大体このような順番に法律の源泉があって、そこからいろいろなことが導かれるのですが、この4つの法律の源泉は、いずれも人間でないということです。アッラーの言葉、つまりコーランであるか。それとも預言者ムハンマド、つまり神の知恵か。それから法学者全員の一致した意見ですが、そこにはアッラーの知恵があるわけです。それから三段論法はロジックです。ロジックは神様に教えてもらったもので、人間の思いではありません。このように神に従う、人間に従わない。こういう原則が非常にはっきりしています。

●イスラムの根本原理「タウヒード」が意味するもの

イスラムの根本的な原理、原則を「タウヒード」といいます。タウヒードとは、「1」という意味です。神は1人、預言者も1人、コーランも1冊。したがって、人類全体がこの神に従うわけだから、人類全体の共同体も1つ。こういう考え方です。この人類全体の共同体のことを「ウンマ」といいます。これがムハンマドの後継者、カリフという人に率いられて、人類が統一されるというのが、イスラムの考え方なのですが、現実にはあちこちに王様がいたり、国があったりします。しかし、他に国があってはいけない。王様がいてはいけない。これがイスラムの基本的考え方です。

これは、「主権国家がたくさんあって、それが国際社会です」というキリスト教徒の考え方と比重に合わないところです。イスラム教とキリスト教の間でいろいろなトラブルが

橋爪大三郎

あるのですが、そのトラブルの根源は何かというと、このタウヒードという考え方にあるのではないかと思います。

イスラム教についてはお話ししたいことがもっとたくさんありますけれども、根本のところをお話ししました。以上です。

宗教で読み解く世界 (3) ヒンドゥー教とカースト制

～講義録～

●バラモン教が生みだした先住民支配のための作戦

橋爪大三郎です。今日はヒンドゥー教について、お話ししましょう。

ヒンドゥー教は、インドにある宗教です。「ヒンドゥー」とは「インドの」というような意味なので、ヒンドゥー教は広い意味でいうとインドで生まれた宗教ということになり、インドにある宗教は全てヒンドゥー教です。一方、狭い意味でいうと、仏教は違います。ジャイナ教も違います。シク教も違います。イスラムは外から入ってきましたから、それももちろん違うのですが、そのようなものを除いて残ったのがヒンドゥー教、ということにはなりません。ただ、ヒンドゥー教はどこまでを指すのかというのは、なかなか曖昧なのです。

歴史的にいいますと、昔々にはバラモン教というものがありませんでした。これは3000年から3500年ほど前にアーリア人という外国人がインドに入ってきて、自分たちの宗教を持ち込みました。それがバラモン教です。アーリア人はギリシャ人だと思ってください。ギリシャの宗教は多神教です。ですから、アーリア人の持ち込んだ宗教は多神教だったので、多神教が持ち込まれたということです。

しかし、入ってきたアーリア人は人数が少なく、もともと住んでいた住民の方は多かったのです。そこでどうしたか。自分たち（アーリア人）は支配階級に居座ろう。そして、先住民をその下っ端、つまり身分が低い人たちにして、この身分の違いがひっくり返らないようにしよう。こういう作戦を立てたわけです。

●インドの本質を形づくるカースト制の特徴

これがカースト制というもののなのですが、そのうちの上の2つにバラモンとクシャトリヤがあり、これが支配階級です。それから支配される側には、ヴァイシャとシュードラがあります。そして、その下にアウトカースト、今はダリットというような名前ですが、そういう人々もいる。つまり、4つないし5つのグループ（階級）があるということです。

普通、本にはこのように書いてあるのですが、インドの考え方をもう少し詳しくいうと、カースト制は2段階になっていて、今、言った4つのグループを「ヴァルナ」といいます。ヴァルナとは普通、「種姓（シュセイ）」といいますが、これが4つあります。その下に「ジャーティ」があります。ジャーティとは「職業集団」とでも訳しておけばいいかと思いますが、社会の基本単位になるような特定の職業に従事する人たちのグループです。

このジャーティというグループは、族内婚といって、旦那さんや奥さん、配偶者を見つける場合、同じジャーティの中から見つけなければなりません。そして、子どもが生まれると、そのジャーティの人になるということで、そのジャーティが再生産されていくわけです。社会的な移動が非常に少ないというのが、カースト制なのです。

このジャーティがどれぐらいあるかというと、インド全体で1,000、2,000といった、すごい数です。そして、それがカースト制の特徴なのですが、上の方から下の方まで、いい方から悪い方まで、清い方から汚れた方まで、1列に並んでいて差別がある、こういうシステムになっています。聞いただけで、とても近代的ともいえず、また何ともいいようがない、伝統そのものの社会です。これが3000年も続いており、インドの本質を形づくっているわけです。

●国中の宗教を取り仕切るカーストの最上位バラモン

ヒンドゥー教は、このカースト制と密接不可分な関係があり、カーストの最上位のバラモンという人たちが宗教活動をするようになっていて、他の人は宗教活動ができないのです。だから、神様を拜む場合、そのときでも必ずバラモンに頼んで、バラモンにお祭りを執り行ってもらいます。自分たちではお祭りができないのです。

似ているのは日本のお葬式かもしれません。日本人は自分ではお葬式ができず、お坊さんに頼まないといけない、と考えていると思いますが、少しこれと似ているところがあり、神様へのお祭り事をするときに、バラモンに必ず来ていただく、というやり方なのです。

こうしてバラモンが国中の宗教を取り仕切っているのです。インドは大変バラバラな国で、言語もバラバラ、人種もバラバラ、それからカーストや社会階層もバラバラで、統一性が全くないように見えるのですが、唯一統一されているのはバラモンが宗教を執り行う

橋爪大三郎

ということです。

そのバラモンは、昔々の古い本、例えばサンスクリット語で書かれた『ヴェーダ聖典』をはじめ本が無数にもあるのですが、そういう本をよく知っていて、その原理、原則に基づいてインド社会を運営、再生産をしている、という形になっています。

●カースト制は古代の「イノベーション」

問題は、なぜこのようなカースト制などというものがあるのか、ということなのですが、これは古代のいわば「イノベーション」だと私は思います。古代の普通のやり方は奴隷制です。奴隷制とは、戦争をして、相手の民族の自由を奪い、奴隷にして、私たちがやりたくない嫌な仕事を全部させよう、というものです。農業であれ、運送であれ、鉱山を掘ることであれ、どんな仕事でも皆、奴隷にやらせて、主人はのらくらしている。これが奴隷制社会です。

でも、主人だって戦争に負ければ、奴隷になってしまいます。とても心理的なストレスが強いのです。一方、奴隷は人格がなく、物を所有することもできず、家族を持って安定して暮らす権利もないという、人権を踏みにじられたような人たちです。

これが世界標準だった時、インド人はそのやり方を取らなかったのです。カースト制を見てみると、先ほど申し上げましたが、ジャーティは結婚できます。相手を選ばないで、自分のグループ（階級）の中から配偶者を見つければ。つまり全員に結婚のチャンスがあり、家庭を持てます。それから、ファミリービジネスをやることになっています。つまり、生産手段を自分で持っているのです。貧乏かもしれないけれど、頑張れば豊かになる可能性もないことはないというように、人々が生きていくのに優しいシステムです。

古代奴隷制が行き渡っている時、インドの人々がカースト制を考えたということで、なかなか偉いと思います。いろいろと知恵があるのです。そして、うまくいったのです。うまくいったから、かえって変えるチャンスがなく、こんなに長い間、インドにはカースト制が残っているのです。時代は近代になり、近代の自由や人権の考え方から見ると、カースト制にはかなり問題がある。こういうものなのですね。

●アンチカースト制として生まれた仏教

さて、カースト制の一番の問題点は、皆が生きていく上で、上の方はいいとして、下の方の人たちは生活が苦しく、そして心理的にも苦しい、名誉が与えられなくて、生きていく意味が分からない、こういうストレスにさらされることです。そうすると、インドでは繰り返し繰り返し、「カースト制はやめましょう」という思想や運動が出てくるのですが、仏教もそういうものの一つです。

仏教を始めたゴータマという人は、バラモンではなく、クシャトリヤの生まれで、王子さまです。本来、宗教活動をやってはいけない人だったのに、無理やり行いました。そして、「悟って仏になった」などと言っています。そして、私たちのグループはカーストと無関係ということで、どんな人が来てもよろしい、どんな人が来ても全く対等に宗教活動をしなさい、あるいはしませんか、という考え方です。

つまり、仏教はアンチカースト制なのです。だからヒンドゥー教と仏教は、そういう意味で水と油、真っ向から対立する関係にあるのですが、ブッダの主張はそこにあったと思います。しかし、1000年、1500年と時がたつと、ヒンドゥー教の方が根強く、インドから仏教は消えてしまいました。こういう流れになっていることはご承知の通りです。

●ヒンドゥー教のいい点は争いが少ないこと

このように、ヒンドゥー教は、インドの現実に非常によく合っている面があるのです。これがインド人のインド人らしさの骨格を形づくっているとさえいえます。ヒンドゥー教のいい点は、おそらく争いが少ないことでしょう。カースト制は職業によって分業します。分業とは相互依存ですから、争うのは非常に難しいのです。

その一方で、閉塞的あるいは伝統的といった、前近代的な側面もあります。これを文化遺産として、引きずって、あるいは受け継いで、近代化に頑張っている人たちもいます。最近、近代化がだんだんうまくいくようになったのですが、そこにはインド人の工夫や知恵があると思います。

このように考えていくと、ヒンドゥー教やインドのことは、少し分かりやすくなるのではないのでしょうか。

宗教で読み解く世界（4）中国と儒教の世界

～講義録～

●中国の本質に関わる儒教・儒学

橋爪大三郎です。今日は中国、そして儒教についてお話ししましょう。

中国には、儒教の他に道教や仏教もあるわけですが、やはり、その中では何と云っても儒教が一番大事です。昔は儒学といい、儒学が中国をつくった、あるいは中国が儒学をつくった、どっちともいえるのですが、中国の本質に関わるのが儒学だと、このようにいえると思います。

さて、儒学についてですが、昔、孔子という人がいて、その孔子が元祖ですから、孔子がどういう人だったかということをお話ししましょう。それから、儒学が中国社会でどういう役割を果たすのかということをお話しします。

●時代は周王朝から春秋戦国時代へ

最初に、孔子という人についてですが、実在した歴史上の人物で2500年ほど前にいたのではないかと思います。当時は春秋戦国時代になりかかる頃です。その頃、周という王朝があったのですが、その末期です。周は中国の3つ目の統一王朝で、周の前に夏（か）、次に殷（いん）という国がありました。ただ、殷は中国では「いん」といわず、商（しょう）という国になります。

そして、3つ目の王朝が周です。その周ですが、はじめは調子が良かったのが、だんだんだんだん盛り下がって、各地に王様のような人々、諸侯という人が出てきました。日本の戦国時代と似ているわけですが、天下統一をうかがって戦争するという時代になっていったわけです。そうした時代になりかかっていた頃のことです。

●青銅器から鉄器への転換が社会変化をもたらした

ではなぜ、周の王朝の調子が悪くなり、各地に諸侯が出てきたのか。一言でいうと、戦争の仕方が変わったからです。周は青銅器時代にできた国で、刀とか甲冑とか、いろいろなものを全て青銅で造っていたのです。青銅は銅とスズの合金で、どちらも非常に希少な金属で値段が高いため、皆に行き渡らない。そこで、ごく一部の人が青銅（ブロンズ）で武装して、大体戦車という馬に引かせる車に乗って、平らな場所を走り回ります。これがすごく戦闘力があり、歩兵はやられてしまいます。歩兵はスピードが遅いので、ほとんど意味がなく、ごく一部の武装した人間が軍事力を独占し、ついでに政治力も握ることになります。これが青銅器時代なのですが、こうして出来上がる社会が貴族制になります。

ところが、だんだんと鉄が普及していきました。鉄は青銅に比べて安く、量がたくさんある。そこで、歩兵全員に鉄製の武器や甲冑が行き渡るようになります。武器だけではなく、農機具も作ったので、農業の革新が起こります。農業生産物が増えると、人口が増えます。人口がたくさん増えると、どうなるか。鉄製の武器で武装して戦車に対抗できるかということで、集団戦法を編み出します。そうして戦車や騎馬隊をはねのけるぐらいの軍事力を発揮します。これが鉄器時代です。

このようなことが古代ギリシャでも起こりましたし、エジプトでも、メソポタミアでも社会の変化が起こったのですが、中国でも起こったのです。

●孔子は有能な人材を登用するためのシステムをつくった

こうした軍事的な革新が起こると、政府の方でも変化が起こりました。今まで貴族が政治をしていたのですが、能力がある人を抜てきして政府職員にしようという動きが起こるのです。孔子はその流れに乗ります。まず能力をつけてあげる。勉強する。そこで、能力がつくと政府職員に採用してくださいとなる。そうしたやり方を始めたのです。

勉強するには教科書が必要です。そこで、彼はいろいろな本から選りすぐって、5つの重要なテキストを編さんしました。これは孔子の最大の業績といわれているのですが、要は政治のやり方が書いてある本です。それを皆で勉強する。勉強するのは貴族ではない人たちです。かなりお金もないと駄目だけれども、要するに志がある有能な若者が田舎から出てきて勉強する。そして、勉強が済んだら政府職員になって国のトップになる。こういうシステムをこしらえたのです。

●諸子百家の中で勝ち残った儒学が重視したのは家族道徳

当時、儒学の他にもいろいろな考え方、やり方ができてきたのです。それを「諸子百家」といったのですが、儒学が勝ち残ったのです。儒学が強かった点は何か。儒学は本を読みますから、皆、字が読めるようになり、行政文書を読んだり書いたりできるようになりました。しかし、それは他のグループも同じです。私が思うには、儒学がとても中国的で現実的だったのは、家族道徳を重視したからです。つまり、儒学には「親を敬いなさい」というルールも入っているのです。

親を敬うとどうなるか。中国は農業国家ですが、中国の農業は小規模な家族経営です。だから、家族経営が安定すると国が安定し、税収も上がって立派な政治ができる。税収が安定し、家族がやる気になるためには、親を尊敬すると大変いい。現役世代のときには一生懸命働いても、老後になって子どもに見捨てられるとなると、安心して働くことはできません。ところが、子どもが親を尊敬していれば、老後の生活が安定する。しかも、「親に孝行するんだぞ」と儒学がいうのには1文もかからない。でも、その効果は、健康保険、介護保険、医療保険、それらを全部国中に行き渡らせたのと同じぐらいの効果があって、農民のやる気が出るわけです。そうすると、農業生産性が上がります。

●儒学は政治学～中国では政治が他の何よりも上～

また、農民は遊牧民に苦しめられていましたから、政府には正規軍をつくって、万里の長城をつくって、自分たちの安全保障をしてほしい。政治が良くなれば生活が良くなる。これが儒教のスローガンといってもいいでしょう。つまり、政治によって社会の問題を全て解決していこう、という強い方向性があるわけです。儒学はそういう意味で、ほとんど政治学なのです。

これが中国人の性格を形づくっていて、政治が経済より上、宗教より上、文化より上、いろいろなものより上。こうなっているわけです。この観点から、中国共産党の社会主義市場経済を見るとどうか。共産党は政治をやるわけですから、政治が軍事より上、経済より上、文化より上、宗教より上という伝統的な中国の考え方で、現在の中国を率いているわけです。そして、このやり方で国際社会の中で存在を主張しているのです。これが毛沢東、鄧小平、習近平がやっていることなのです。

橋爪大三郎

つまり、これは中国人が支持しているからこそ、こういう考え方になってくるわけですが、これは形を変えた儒教だといえるかと思います。

宗教で読み解く世界（5）日本の不思議と世界のゆくえ**～講義録～****●宗教の社会的地位が低い日本**

橋爪大三郎です。私の話も5回目になりますが、日本についてお話ししましょう。

日本の宗教というと、神道があり、後から仏教が入ってきています。ということですが、日本では宗教のことをあまり考えることがなく、宗教の社会的地位が低い。これが日本の特徴です。世界でこのような国はあまりないと、まず思っていたきたい。

キリスト教の世界では、キリスト教という宗教の価値は非常に高いのです。イスラム教の世界では、宗教の価値はキリスト教の世界よりももっと高いかもしれません。ヒンドゥー教の世界では、宗教を担当するバラモンが一番社会のトップに君臨していました。中国は政治が頑張っているのですが、なぜ政治家が政治を頑張っているのかというと、儒教の原則を踏まえているからです。

このようなわけで、世界の大部分の地域では、宗教は社会的地位が高く、最も尊敬され、その指導的な役割を担う人が深くそれにコミットするものなのです。

●行政指導に左右されてきた日本の宗教

一方、日本では宗教はあまり大したことではないということになっているのです。これはいろいろ考えると、政府の行政指導のせいといえるかもしれません。江戸幕府は約300年にわたって仏教を軽視して、仏教に宗教活動をやってはいけないことにしました。その代わりに、戸籍簿の整理とか、葬式とか、本来の仏教と関係ないことばかりさせて、それで何とかやっていきなさいというようなことになっていたのです。宗教に当たるものとして儒学があるから、武士は儒学をやりなさいということで、儒学と仏教を競わせていたのです。

この江戸時代の約300年があった後に明治時代になったのですが、明治政府は考えました。外国のキリスト教が入ってきて、日本がクリスチャンになってしまっ外国の言う

橋爪大三郎

ことを聞いたら大変だ。植民地を見ると、宣教師が入ってきて、それで国中にキリスト教が広まって、民族独立ができなくなってしまったという例がたくさんあった。だから、この心配は理由がないわけではない。そこで、キリスト教を痛めつけるようなことにしたのです。でも、露骨に行くと外国が黙っていませんから、陰湿にという意味で、考えたのが神道を利用することでした。公民教育というものがあって、「天皇陛下は偉いお父さんです。天皇がいて、日本は神の国で良かったですね」というようなことを散々やっていたのです。

だから、全ての宗教は国家神道より下ということになってしまいました。この癖が抜けないまま国家神道は解体してしまいましたから、皆、何が何だか分からなくなったのです。こういう経験をしているのは日本だけです。だから、これにこだわらないでください。宗教というのは大切な活動です。

●仏教と神道は水と油の関係

さて、日本人にとって、宗教上の大きな問題は、神と仏の関係です。日本にはもともと神がいた。そこに仏が入ってきた。仏教と神道というべきか、もともとあった信仰との間には水と油の関係がありました。では仏とは何か。悟ったインド人で、ゴータマのことで、偉い知識青年で、日本人と関係はないのです。

では神とは何かというと、いろいろな考え方があるのですが、私がとても信頼できる定義だと思うのは、『古事記伝』第三巻に書いてある、本居宣長の説です。本居宣長は神について、大体このようなことを言っています。神とは、『古事記』『日本書紀』など古御典（いにしえのみふみ）」に載っている神（もちろん、アマテラスとか、スサノオとか、いろいろな神が入ります）のことで、「其を祀れる社に座す御霊（みたま）をも申し」、つまり、神社に祭ってあるものも神様だというわけです。そうすると、明治神宮の明治天皇とか、東郷神社、乃木神社とか、靖国神社とか、そういうのも皆、御霊ですから、神になります。3番目がまだあって、鳥、獣、木、草、海、山、何でもいから、「常ならず優れたること」とある。つまり、平均値を逸脱していて、それで私はびっくりした、感動したのであり、こういうものは皆、神である。このようなことを言っています。「優れたる」というのは、いい方向に優れていてもいいし、悪い方向に優れていてもいいのです。

以上をまとめると、日本の自然を見て「ああ、感動した」となると、これは全部、神になります。自然には、山あり、川あり、木あり、岩ありと、いろいろなものがある。しめ縄を張るとご神体になるではないですか。つまり、日本の神道は自然崇拜であって、それ

橋爪大三郎

を人格化した部分がある。こういうものなのです。

●仏教と浸透を調和させようとして唱えた本地垂迹説

さて、こういうものがもともとの日本人の自然観、宗教観だとすると、仏教とつながりが悪いのです。仏教というのは、この世界のメカニズムを認識して、認識して、認識し尽くして、悟って、あまりに知識が立派であるから尊敬に値する、そういう人がブッダですということで、そうした知的活動のことです。自然現象（自然崇拜）というのは、そんな知的活動は全く行いません。ただ山は山、川は川なのです。

日本人は困った。困っていろいろ考えた。つまり、仏教と神道を何とか調和させようと思ったのですが、平安時代の末になって、お坊さんがこのような説を唱えました。

「皆さん、仏教と神道をそんなに区別して考えるのはやめましょう。なぜなら同じだからです。もともとインドにいた仏様や菩薩が日本の民衆を救うために日本にやって来た。そして、あちこちに降り立って神社の神様になったのです。だから、神様の正体は仏様で、神様を拝めば仏様を拝んだことになり、仏様を拝んだら神様を拝んだことになるのです」

このような学説（本地垂迹説）は仏典のどこかに根拠があるのかと調べてみると、どこにも書いてありません。どこにも書いていないし、何の根拠もないのですが、日本社会の法則として、皆で相談して反対がなければその通りになる、というものがあります。したがって、平安時代のこの社会法則によって、この本地垂迹説は正しいことになってしまいました。このため、幕末になるまで日本人は仏と神を同じだと思っていたのです。

●本地垂迹説から廃仏毀釈に一転した経緯

ところが、幕末に廃仏毀釈、神仏分離といって、仏教と神道は違うという一大キャンペーンがありました。なぜそのようなものが必要だったかというと、尊王攘夷に関係あるのです。つまり、明治維新の原動力は尊王思想です。天皇が本当の君主である。よって、武士はもちろん日本人民は全員、天皇の下に結集して、オールジャパンの政府、オールジャパンの日本国をつくって、外国と対抗しなければならない。こう説きました。幕府がオタオタしていたわけですから、この考え方は非常に説得力を持ちました。

さて、オールジャパンはいいとして、その中心になるのがなぜ天皇なのか。そうすると、

橋爪大三郎

国学の学者など、いろいろな人が言います。それは次のような論理です。

『古事記』『日本書紀』を読みなさい。神様、アマテラスの孫がニニギノミコトで、これを天孫降臨というのだが、高千穂峰に降り立った。そこできれいなお姉さんと結婚して、子どもが生まれ、ひ孫が神武天皇になって即位した。つまり、天皇は神の五世の孫。それが今に伝わっているわけだから、神様の子孫。だから天皇は偉い。というものです。

そうすると誰かが、「ちょっと待ってください。神様とは仏様のことではなかったのか」と意義を唱えたわけですが、本地垂迹説からいえばそうなります。これはまずい。天皇の先祖がインド人になってしまうからです。

そこで、尊王思想の側は、本地垂迹説はなかったことにすると言って、なしにしてしまったわけです。そこで、天皇は純然たる神道家になり、仏教徒だったのにその証拠を隠滅し、それで東京に来て、賢所（かしこどころ）などを急造して、あたかも大昔から神道一本でやっていたかのようになったのです。日本国が天皇の下にまとまるのは天皇が神の子孫だからで、このイデオロギーのために仏教は邪魔だったのです。それで仏教を分離した。これが廃仏毀釈です。

このように天皇というシンボルがあったので、オールジャパン（言葉を変えるとナショナリズムですが）をととても作りやすかったのです。

これは日本の近代化の秘密なのですが、近代化のために天皇を使った副作用もありました。天皇が命令すると、それが正しいことになってしまうということが起きたのです。天皇はあまり命令しないのですが、軍部が天皇の名前でいろいろなことを命令すると、それが正しいことになってしまい、日本人はそれに反抗できない。これが大きな副作用です。その結果、国の針路を間違えたというのも、日本の近代において非常に重要なポイントです。

●世界の宗教を理解するためにおすすめの本

日本についてはこのようなことになりますが、ここまでのシリーズレクチャー5話をまとめる意味で、それぞれの宗教について、私分かりやすく書いた入門書をご紹介します。

まず、キリスト教については、『ふしぎなキリスト教』（橋爪大三郎著、大澤真幸著、

橋爪大三郎

講談社新書)という本があります。これは対談形式ですが、とても分かりやすい内容だと思います。イスラム教については、最近出た(2018年12月発刊)『一神教と戦争』(橋爪大三郎著、中田考著、集英社新書)という本があり、これもとても分かりやすいと思います。

インドについては、ヒンドゥー教についての本はないのですが、『ゆかいな仏教』(橋爪大三郎著、大澤真幸著、サンガ新書)という本があり、インド社会についてもかなりいろいろ書いてあります。仏教についてはもう1つ、法華経の解説本ですが、『ほんとうの法華経』(橋爪大三郎著、植木雅俊著、筑摩書房)というタイトルです。仏典の中で最高の経典ともいわれる法華経は28章あるのですが、それを逐一、詳しく検討していくという、初心者の方でも十分楽しんでいただける本です。

それから中国については、『おどろきの中国』(橋爪大三郎著、大澤真幸著、宮台真司著、講談社現代新書)という本があります。これは現代中国のことも古代中国のことも書いてあって、最初のとっかかりとしては大変分かりやすいと思います。

また、日本については、『げんきな日本論』(橋爪大三郎著、大澤真幸著、講談社現代新書)という本があります。これは日本史の本なのですが、日本史には意外な不思議ポイント、驚きポイントがあって、それを順番につつき出していますので、楽しんでいただけるのではないかと思います。

それからキリスト教に戻りますけれども、最近では『アメリカ』(橋爪大三郎著、大澤真幸著、河出新書)という本を出しました。トランプ政権の舞台裏をキリスト教プラグマティズムから解き明かすという本です。

概説書としては、2つご紹介しましょう。1つは『世界がわかる宗教社会学入門』(橋爪大三郎著、ちくま文庫)です。これは満遍なく世界の宗教をコンパクトに紹介しているもので、最初に読むならこれかなと思います。大学の講義をベースにしたものなので、少し教科書っぽい本です。また、レクチャーっぽく分かりやすいという点では、『世界は四大文明でできている』(橋爪大三郎著、NHK出版新書)は情報量が精選されており、かつロジックはくっきり取り出せるようになっているので、これもお勧めしたいと思います。ちなみに、このシリーズレクチャーでの講義はこの本に従って組み立ててみました。